論文要旨

論文題目：アダム・スミスの経験論的道徳理論――「人間本性の抽象科学」と道徳判断の諸原理

SD161003　太田浩之

章立て

序論
第一章　『道徳感情論』におけるスミスの経験的分析
1. 『道徳感情論』第七部におけるスミスの批判的観点
2. 「天文学史」におけるスミスの理論理解
3. ハチスンの美的感覚とスミスによるハチスン批判
第二章　『道徳感情論』の基本的原理
1. 共感と道徳判断
2. 功績と罪過
3. 自己に対する道徳判断
4. 自己に対する道徳判断と自己欺瞞
第三章　行為の有用性と快楽・苦痛が道徳判断に及ぼす影響について
1. 有用性の知覚と道徳判断
2. 行為が直接的にもたらす快楽・苦痛と道徳判断
第四章　慣習と道徳判断
1. 美的判断に対する慣習の影響について
2. 道徳判断に対する慣習の影響について
3. 慣習に基づく判断と共感に基づく判断
4. 反省としての共感に基づく判断
第五章　道徳判断の諸原理と自然的判断としての共感的判断
1. 諸判断の整理
2. 自然的判断としての共感的判断
3. スミスによる経験的分析と共感的判断
結論
参考文献

論文要旨

本論文は、道徳判断に関する経験や観察に基づき、道徳判断のあり方を正確に記述し説明することを主要な目的とした著作として、アダム・スミス（1723-1790）の『道徳感情論』（1759）を捉え、その観点から、スミスの道徳理論を分析することを主たる目的としたものである。その分析を通じて、本論文では、スミスが、多様な道徳判断のあり方を認めていること、換言すると、道徳判断の複雑性を認識していることを明らかにした。具体的には、慣習に基づく判断、共感に基づく判断、一般的規則に基づく判断、有用性に基づく判断という、大きく分けて四つの異なる道徳判断を区別しながら、スミスが議論を展開していることを明らかにした。その上で、本論文では、それら四つの道徳判断の間の関係をスミスがどのように捉えているかを論じた。最初に、反省という精神的作用に着目し、(1) 一般的規則に基づく判断／有用性に基づく判断、(2) 共感に基づく判断、(3) 慣習に基づく判断、の順番で、反省を必要とするとスミスが考えていることを示した。次に、共感に基づく判断をスミスが『道徳感情論』の中心に位置付けていることの意味を問い、その理由として、共感に基づく道徳判断への傾向性を人間が持っているとスミスが認識していた、という解釈を提示した。つまり、異なる反省の程度に応じて人は異なる仕方で道徳判断を行いうるが、その中で、人間は共感に基づく判断を行うように傾向づけられていると論じている点にこそ、『道徳感情論』の一つの大きな特長を見出すことができると論じた。このように、多様な道徳判断をスミスが認め、その中に共感による判断を位置付けていたとする解釈は、従来の研究には見られない解釈であり、この点に本論文の独創性がある。以上が、本論文の骨子である。より具体的に、各章では以下のように議論を展開した。

第一章では、哲学的理論を構築する際に経験や観察を重視するスミスの姿勢を明らかにした。まず第一節では、『道徳感情論』第七部を分析することによって、スミスが、経験や観察を重視する立場を採っていると考えられること、そして、経験や観察に正確に即した理論の構築を妨げる要因として、簡潔な説明原理を志向する人間の傾向性があると考えていることを論じた。その上で、第二節では、通常スミスの方法論を読み取る資料として参照されている「天文学史」を分析し、広く受容される哲学的理論の特徴として次の二つの点をスミスが認識していることを明らかにした。それらの二つの点とは、(1) その理論が、経験的事実や観察内容と一致していること、そして、(2) 簡潔な原理によって構成されていること、である。第一節と第二節の分析を通じて、スミスが、理論構築において経験や観察を重視していたこと、そして、人間には簡潔な原理を好む傾向性があると認識していたことを示した。しかし、本論文の主要な考察対象である『道徳感情論』では、簡潔な原理を志向する人

間の傾向性が、経験や観察に即した理論の構築を妨げる要因として描かれていることから、第一節と第二節とをまとめた解釈として、スミスが経験や観察に力点を置いた理論構築を目指している、という解釈を提示した。つまり、スミスが、可能な限り簡潔な原理から構成される理論を構築しようとしていた可能性はあるものの、何よりも、その理論が経験や観察に正確に即したものだということを徹底的に重視した上でそうした、という解釈を主張した。

第三節では、ハチスンとスミスとを比較することによって、その解釈の妥当性をさらに示した。まず、ハチスンが、経験的事実や観察を重視するという基本的な線をスミスと共有しつつ、美的感覚として簡潔な説明原理を好む人間の傾向性を論じていることを明らかにした。さらに、スミスと同様にハチスンも、美的感覚が理論構築の際に問題を生じさせる可能性があると認識していたことを明らかにした。その上で、再度『道徳感情論』第七部に戻り、スミスによるハチスン批判を見ることで、経験と観察に即した理論の構築に力点を置くスミスの姿勢を別の側面から示した。より具体的には、ハチスンを批判的に検討している箇所で、スミスは、人々の道徳判断に関する経験に依拠しながら、道徳判断のいくつかの重要な側面をハチスンの理論では説明できないと指摘しており、このことは、スミスの全体的な力点が経験や観察の重視という点に置かれていることを示している、と論じた。以上の考察を通じて、第一章では、経験と観察を徹底して重視するというスミスの基本的な姿勢について論じた。

この第一章の分析に基づいて、本論文では次の解釈の可能性を提示した。それは、単純な説明原理によって構成される理論の構築よりも、道徳判断の複雑性の認識に力点を置いた理論の構築をスミスが行なっている、という解釈である。つまり、ある種の還元主義に対する批判的な意識を持ちながら経験や観察を徹底して重視するというスミスの姿勢は、道徳判断の多様性あるいは複雑性の認識に結びついている、という解釈を提示した。第二章から第四章までの分析は、この解釈の妥当性を示す議論として位置付けられる。

第二章では、まず、スミスが『道徳感情論』で展開している基本的な原理を考察した。その際、『道徳感情論』第四版以降のタイトルを参考にして、『道徳感情論』第一部から第三部までの議論を順番に考察し、他者に対する道徳判断と自己に対する道徳判断とに関するスミスの議論を考察した。より具体的には、まず、第一節で共感という概念を用いてスミスが道徳判断をどのように説明しているかを明らかにした後、第二節で、同じく共感を主要概念としながら功績と罪過という行為の性質をスミスがどのように論じているかを考察した。これら二つの節の分析は、他者に対する道徳判断についてのスミスの説明に対する分析である。それらに対して続く第三節では、自己に対する道徳判断に関するスミスの議論を分析

した。そこでは、自己を観察している観察者を想定して共感を行いながら判断するという、良心という自己への判断のあり方を論じる一方で、それとは異なる自己への判断のあり方を義務の感覚としてスミスが論じていたことを明らかにした。以上の第一節から第三節までの分析は、『道徳感情論』でのスミスの基本的な理論を把握することを目的としている。

その上で、最終節の第四節では、本論文第一章で提示された解釈を意識しながら、自己への道徳判断をめぐるスミスの議論に着目した。具体的に述べると、「自己欺瞞」という現象をスミスが把握していることに着目し、自己への道徳判断について詳細に分析を行なっている点に、ハチスンやヒュームなどの同時代の思想家には見られないような特徴がスミスの理論にはあると論じた。そして、「自己欺瞞」という現象の把握が、良心による判断と義務の感覚による判断という異なる道徳判断の認識につながっており、ここに第一章との関連があることを指摘した。つまり、道徳判断に関する経験や観察を徹底して重視するというスミスの姿勢が、自己への道徳判断に対する詳細な分析を可能にし、それが、良心による判断（共感に基づく判断）と義務の感覚による判断（一般的規則に基づく判断）という異なる道徳判断の認識につながっていることを明らかにした。

第三章では、行為の帰結と道徳判断との関係に関するスミスの議論を考察した。その際、スミスの議論を二つに分けて分析を行った。一つは、有用性の認識と道徳判断との関係に関する議論であり、もう一つは、ある行為が直接的に快楽や苦痛をもたらしたときに、それが道徳判断に与える影響に関する議論である。前者を第一節で、後者を第二節で扱った。第一節では、まず、道徳判断の主要な源泉は有用性ではなく適切さを認識することにある、とスミスが『道徳感情論』第四部で論じていることを明らかにした。しかし、このことは、あらゆる道徳判断が適切さ（共感に基づく判断）に基づいて行われるとスミスが主張していることを意味しているわけではなく、スミスが、実際に、有用性の認識にのみ基づくような道徳判断を認めていると考えられる箇所があると指摘した。その上で、適切さに基づく判断（共感に基づく判断）と有用性に基づく判断とが、反省を特徴とした人間の精神的状態によって区別されていることを明らかにし、スミスが、それらの判断を、判断主体の違いによって区別しているわけではなく、人間一般に可能な判断として捉えていることを示した。

第二節では、行為が直接的にもたらす快楽や苦痛が道徳判断に与える影響に関して、スミスが、行為の動機に基づく判断と帰結に基づく判断という異なる判断のあり方を論じていることを明らかにした。そこで中心的に論じたのは、スミスがどちらかの判断を正当化しようとしていたということではなく、人間が日常的に実践している判断として、それら二つの道徳判断を捉えている、ということである。さらに、有用性に関する考察と同様に、スミスが、反省を特徴とする精神的状態によって、動機に基づく判断と帰結に基づく判断とを区別

していること、したがって、両判断は判断主体の違いによって区別されているわけではないということを論じた。これらの考察によって、スミスが人間一般に可能な判断として、動機に基づく判断と帰結に基づく判断とを捉えていることを示した。第三章の分析を通じて、スミスが共感に基づく判断とは異なる判断として、有用性に基づく判断を認識していたこと、そして、共感に基づく判断にも、動機に基づく判断と帰結に基づく判断という異なる判断のあり方があると認識していたことを明らかにした。このようにスミスが多様な道徳判断を認識していたことは、道徳判断に関する経験や観察を徹底して重視するというスミスの姿勢が道徳判断の複雑性の認識に結びついているという、第一章で提示した解釈の妥当性を傍証するものとして捉えられた。

第四章では、スミスが慣習を主題としている『道徳感情論』第五部の議論を考察した。具体的には、第一節で、美的判断に対する慣習の影響についてスミスがどのように議論を展開しているかを考察し、慣習が、観念連合を形成するという想像力の作用を通じて、人間の美的判断に影響を及ぼすとスミスが考えていたことを示した。第二節では、第一節での分析を踏まえて、美的判断と同様に道徳判断に対して慣習が影響を与えるとスミスが論じていることについて考察し、スミスが、慣習に由来する道徳判断について論じていることを明らかにした。第三節では、慣習は道徳判断に大きな影響を与えない、という『道徳感情論』第五部のスミスの基本的な見解を理解することを試み、その過程で、スミスが慣習に基づく判断と共感に基づく判断という、二つの異なる道徳判断を議論の中で扱っていることを明らかにした。第四節では、反省という精神的作用に着目し、慣習に基づく判断よりも共感に基づく判断をスミスが反省的な判断として捉えていることを示した。それによって、慣習に基づく判断と共感に基づく判断とを、ある特定の判断主体に属する判断としてではなく、人間一般に可能な、異なる精神的状態によって行われる判断としてスミスが捉えていると解釈することが可能であると論じた。以上のように、慣習に基づく判断と共感に基づく判断という異なる判断をスミスが認識していることを明らかにした第四章もまた、スミスが道徳判断の複雑性を認識していたという第一章で提示した解釈の妥当性を傍証する根拠として位置付けられる。

第五章では、まず、第二章から第四章までの分析で明らかにした多様な道徳判断の整理を第一節で行った。それらの道徳判断とは、慣習に基づく判断、共感に基づく判断（動機に基づく判断と帰結に基づく判断）、一般的規則に基づく判断、有用性に基づく判断、である。第一節では、これらの判断の内実を再度確認した上で、反省という精神的作用に着目して、それらの判断を整理した。より具体的に述べると、慣習的判断よりも共感的判断の方が反省的だとスミスは捉えており、共感的判断よりも一般的規則に基づく判断、あるいは功利的判

断の方が反省的だとスミスは捉えている、ということを論じた。このように整理した上で、第二節では、道徳判断の複雑性を認識しながらも、スミスが『道徳感情論』で一貫して共感に基づく判断を扱っていることの含意について考察を行った。その際、共感に基づく判断を自然的なものとしてスミスが述べている点に着目して分析を行った。その分析を通じて、本論文では、スミスが共感に基づく判断を自然的な判断とすることによって、人間が共感による判断へと傾向づけられていることを意味している、という解釈を提示した。これら第一節と第二節の考察を通じて、多様な道徳判断を認識した上で、共感による判断へと人間が傾向づけられていることを捉えている点に、『道徳感情論』の一つの大きな特長を見出すことができるということを論じた。最後の第三節では、スミスが、功利主義的な議論によって共感に基づく判断を正当化しているという解釈を批判的に検討した。それによって、共感に基づく判断をスミスが功利主義的観点から正当化しようとしているとは考えられず、スミスの理論の要点は、あくまでも、共感に基づいた判断へと傾向づけられた存在として人間を描いている点にあると論じた。